

悲惨な一日

辛島初子

二十三歳の夏のよく晴れた朝の一時の出来事でした。弟、妹を送り出し、台所で麦茶をいっている母に、今日の飛行機の音は違うねと言って、川側の窓ぎわに立ってスタレを上げ飛行機をみた瞬間でした。数百個のフラッシュをたいした様な光でした。音は聞こえませんでした。キラッと光を受け思わず両手で顔を覆い坐り込んだところまでは覚えています。それからどのくらい時間が過ぎたかわかりませんが、二階の明るい窓ぎわにいたはずなのに、辺りは闇（やみ）の中です。身動きひとつできません。

二階の梁（はり）に押しつぶされて気を失っていたようです。やっとの思いで抜け出して辺りを見ると、一面瓦礫（がれき）の山です。体中の火傷やすり傷が痛みます。市内から郊外へと被災者がやって来ます。浮世絵の幽霊のように、両手を前に突き出して、指先には、ほろをぶら下げているように見えましたが、それは腕の皮膚が火傷で、ずりりとむけて垂れ下がり、爪の所で辛うじて止まっているのです。衣類はもちろん焼け焦げて、身につけるものも満足になく、ただ水を求めて川原へ下りて行きます。先着の負

傷者が水のそばでたくさん息絶えています。水辺までたどり着き安心して息絶えた人もいたことでしょう。腹を丸々とふくらませた無数の軍馬の死体もあります。中でも悲惨この上なかつたのは、鋳物工場で勤労奉仕をしていたのでしょうか、四つばいで鳴き声か悲鳴かなんとも言えない声で、尺取り虫のようにはっている婦人の姿でした。足ははれ上がってかばのようになり、足裏にはノロ（溶材）がべつとりと、げたの厚みほど付いています。恐ろしくて手助けもできません。ノロをはがそうと思うと、骨を残して足の裏の筋肉が根こそぎ取れそうです。避難途中の人もただ見守るのが精一杯の様子でした。

避難の人々といっしょに山の手を目指し、三滝山麓に避難しました。